

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00321

研究課題名(和文) 近世前期江戸出版界における 江戸 意識の萌芽についての研究

研究課題名(英文) Research on the emergence of &lt;Edo&gt; consciousness in the early modern Edo publishing world

研究代表者

母利 司朗 (MORI, SHIRO)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：10174369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀は、日本の商業出版がはじまり、盛んになっていった時代である。当初は、長らく政治・経済・文化の拠点であり続けた京都での出版が盛んであったが、やがて新興都市江戸においても商業出版が行われ出す。江戸での出版は、もともとは京都の支店を中心とした京都での出版とかわらないものがおこなわれていたが、やがて徐々に京都とは異なる個性的な特徴が見いだされるようになる。本研究は、江戸での出版が、「江戸」という都市を意識しはじめた様相を明らかにしようとしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在では、関西(大阪・京都)対関東(東京)という図式で、様々なことが対比的に語られることが少なくなっている。しかし、東京に本社のある出版会社で作られた本と、大阪や京都で作られた本が、この東西比較の対象にとりあげられることはほとんどない。しかし、商業出版がはじまり盛んになっていった17世紀前半においては、出版について、はっきりとした東西による違いが認められた。出版の先進地である京都の出版にたいして、新興都市江戸の出版がどのような個性を出し「江戸」らしさを主張しようとしたのかをさぐることは、現在の東西比較にも通じる興味深い問題である。

研究成果の概要(英文)：The 17th century was a time when commercial publishing in Japan began and became popular. Initially, publishing was popular in Kyoto, which has long been a base for politics, economy, and culture, but eventually commercial publishing will begin in the emerging city of Edo. Originally, publications in Edo were similar to those published in Kyoto, centered on branches in Kyoto, but eventually, unique characteristics different from those in Kyoto were discovered. This study attempts to clarify the aspect in which publication in Edo began to be aware of the city of "Edo."

研究分野：日本近世文学

キーワード：江戸版 出版 大師流

## 1. 研究開始当初の背景

近世前期に江戸の本屋から出版されたいわゆる「江戸版」については、従来から、印象的なレベルで、「独自」「独特」という言葉によってその特徴が指摘されてきた。これについて、母利は、JSPS の補助金を受けながら、版下本文の具体的な特徴を明らかにする論文を発表し、また上方版にたいしての本文(テキスト)自体の性格についても論を重ね発表してきた。江戸版の「独自」「独特」という印象は、印象としては否定できないものの、厳密な意味での「独自」性について、のより詳しい考察が必要となろう。また近年では、江戸の本屋が、上方の本屋と意外なほど連携をはかっていたことも明らかにされており、結局、近世前期の江戸の本屋の出版物における「独自」性の源である「江戸」らしさとは何なのか、あるいはそれはどこから来たものなのか、ということの解明がますます必要となってきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、近世前期の江戸の出版物における「江戸」らしさの由来、それがどのようにして発現してきたのか、について明らかにしようとするものである。

## 3. 研究の方法

- (1) 近世前期の江戸における出版物の本文(テキスト)および本文版下の書風、料紙といった点について、その元版となったと思われる上方版との比較検討をする。
- (2) 近世前期の江戸における出版物の本文版下の書風について、当時の人々が、様々な書流の書風についてどのような意識をもっていたのかを明らかにし、その中における大師流(唐様)の特徴と上方版の中での採用のされかたを見る。書流にたいする当時の人々の感覚や意識をたどるこのできる俳諧を主な資料として利用する。

## 4. 研究成果

以上の、研究当初の背景、目的、方法をふまえて、本研究では次のような研究成果を得た。本課題研究は、江戸の本屋が、上方の本屋との連携の中で、どのように「独自」性を発揮しようとしていたのか、その「江戸」意識の萌芽について明らかにしようとするものである。

初年度には、以前考察し論文を発表したことのある『江戸新用文章』という極初期の江戸版の往来物を再度とりあげ、その後判明した伝本を俎上に載せながら、あらためてこの本と上方版との関係を調査した。考察結果は「古版『用文章』再考 近世前期江戸出版界における江戸意識の萌芽(1)」(『京都府立大学学術報告(人文)』第70号・平成30年12月刊)に発表した。

論文で明らかになった最も大事な点は以下の通りである。明暦3年の刊記をもち、『江戸新用文章』という題簽をもつ唯一の伝本(下巻のみ、母利蔵)と同版とみられる伝本(個人蔵)が新たに出現したが、これも下巻のみであり、かつ題簽を欠く。しかし、表紙の見返しに、江戸の地名を記した寺院の名前と延宝年間の年次の落書きがあり、題簽を写したと思われる「新用文章」という落書きもある。明暦3年という刊記が元の上方版のものかどうか曖昧なままであったが、これにより、本書の江戸における出版も、明暦3年からそう遅れることのない出版であったことが明らかになった。上方の出版物の単純な覆刻版であるにもかかわらず、江戸の地図類を除けば、書名に江戸を冠させた最も早い出版物は、今のところこの往来物しかない。江戸の本屋における江戸意識の萌芽は、確実に明暦ころにはじまっていたということである。

2年度目は、本来以下のような計画を立てていた。江戸版として比較的有名な『武者物語』(明暦2年松会版)には、その元となった上方版(承応3年奥書・荒木利兵衛版)が存在するが、その伝本の中の京都大学附属図書館本(旧大惣本)の紙質が江戸版に特徴的な漉き返し紙ではないか、との感触のもと、調査をしてみたが、結局通常の楮紙であろうとの結論に至り、料紙の面からの「江戸」意識の発現についてはつきとめられなかった。

最終年度は、2012年度JSPS補助金による研究成果「近世前期江戸版の本文版下」(『京都府立大学学術報告(人文)』64号・2012年)を発表したさいには見落としていた、弘法大師の書風に淵源を求める大師流の書風に注目し、江戸版との関連を考察した。大師流はいわゆる唐様の一流派と位置付けられる。大師流にたいして、当時の人々がどのような感覚をもっていたのかを示す直接的な資料は見つけられなかったが、大師流を代表とする唐様にたいしては、「いかでがてんの参るべき」「ちんふんりん」「よめかぬる」「ことなる文字の筆勢」「こびた」という当時の人々の評語を見つけることができた。大師流は、奇異な、なんともつかみがたい書風として受け取られていた可能性が高い。これは、御家流のような目慣れた標準的な書風から大きく離れた書風にたいしての違和感から来た感覚であろう。この上に立って近世前期版本の版下本文

を見てみると、上方の初期出版物の中で、このような特徴と同じ特徴をもつものは、以前江戸版との関連を指摘したことのある浄瑠璃本屋の出版物であった。デフォルメされた大師流の書風は、上方の出版物においては、浄瑠璃本、あるいは浄瑠璃本をあつかう本屋で出版された本にほとんど専用的に用いられていた書風であったが、それが江戸においては、浄瑠璃本の枠をこえて広く採用されることとなったのだと考えられる。一般には見慣れない標準的な書風でない大師流の版下文字は、おそらく当時においても、本の版下の書風としては違和感をもって受け止められたことであろう。この特異な書風を、意識的に採用し、多用したのが、江戸の出版物であった、ということであり、江戸の出版物が、上方にたいして江戸らしさを出そうとした一つのプロセスが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 母利司朗	4. 巻 70
2. 論文標題 古版『用文章』再考 近世前期江戸出版界における 江戸 意識の萌芽（1）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告（人文）	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 母利司朗	4. 巻 72
2. 論文標題 近世前期の書流と江戸版 近世前期江戸出版界における 江戸 意識の萌芽（2）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告（人文）	6. 最初と最後の頁 247-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------